HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近世浄土宗と蝦夷地［全文の要約］
Author(s)	宮本, 花恵
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13399号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74557
Type	doctoral thesis
File Information	Hanae_Miyamoto_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　宮　本　花　恵

学位論文題目名
近世浄土宗と蝦夷地

本論では、近世における浄土宗と蝦夷地の連関を検討する。文化元年（一八〇四）、幕府によって蝦夷地に初めての仏教寺院が誕生した。天台宗帰嚮山厚沢寺等澍院（以下、シャマニ等澍院）・浄土宗大臼山道場院善光寺（以下、ウス善光寺）・臨済宗景運山国泰寺（以下、アッケシ国泰寺）の三寺院である。これらを総称して「蝦夷三か寺」、または「蝦夷三官寺」という。総称については議論があるが、近世の寺檀関係に基づかず幕府の扶持によって運営されており幕府主導のもと建立された点、および明治維新を迎えるまで経済的保障を受けていた点に鑑み、「蝦夷三官寺」を用いることとする。蝦夷地における仏教寺院建立は、幕府の蝦夷地政策と連動したもので、警衛に向かった和人に対する葬祭や祈祷という眼前の問題に対処する形で決定した。以上の経緯をふまえ、本論では近世浄土宗と蝦夷地を検討するにあたり、とくにウス善光寺を事例としてあげる。

幕府は中世以来仏教が持っていた特権を剥奪し、寺院法度を制定して権力の下に支配した。各宗派の本山を確定や知恩院門跡の設置など、新たな宗教秩序を構築した。本山の住職の任免は幕府が掌握するとともに諸宗一派を支配構造に組み入れた。浄土宗も同様に、江戸の増上寺は幕府権力を背景に重層的支配関係を構築した。京都の知恩院は門跡を擁し権威を高めた一方、実質的な差配は触頭である増上寺が担った。そのため宗門の栄達を目指すには、まず関東での修学が求められたのである。周縁に位置する宗教者もまた同様に幕府の支配構造に組み込まれた。よって幕府と教団による重層的な支配構造が形成されたのである。

上述の背景の中、宗門内部から僧風の刷新を図り、戒律復興を求める集団が現れる。霊潭は、真言律から受戒を承け、新しく浄土律を派生させたのである。真言律の明忍を始めとする戒律復興と連動し、浄土律は展開する。浄土律の祖である霊潭は、もともと増上寺で修学した学僧である。霊潭の周囲には、江戸初期の浄土宗学僧で知られる忍徴や寅載がいる。霊潭は、近江安養寺の戒山慧堅のもとで受戒し学んだ。やがて忍徴の依頼を受け、奥州相馬興仁寺二世に就任する。期せずして浄土律の北進を果たすのである。京都の学僧と奥州の念仏僧とが繋がる契機となった。相馬中村藩主昌胤という強力な外護者の下、浄土宗の教線は拡大されたのである。奥羽地域の浄土宗寺院は、浄土宗名越派本山の山崎専称寺の支配を受ける。しかし興仁寺は京都知恩院を本山とし、全く新し

い支配秩序をもって建立したのである。これは京都の高僧を招く事となり、戒律を学ぶ僧侶が集う事となる。

相馬中村藩における浄土宗を庇護する土壌は、やがて奥羽の念仏聖・無能をも招く。時を同じくして、浄土律の祖である霊潭と念仏聖・無能が活動したのである。無能は興仁寺塔頭の不乱院で法談を開くなど、霊潭と接する機会があったと考える。興仁寺三世として招かれた宝洲は無能と消息を遣り取りし、敬慕するに至る。宝洲と無能の交流は、無能の最晩年にあたる。相馬中村藩内で見聞した内容を宝洲は出版を介して広めた。京都の学僧が奥羽に与えた影響と同じく、奥羽の念仏行者が与えた影響も大きかったのである。無能の後継者として現れた不能は、無能の基盤を継いでさらなる教化に励んだ。無能の名前を冠した無能寺の建立と共に、不能は江戸と京都で浄土律を学び、無能寺は奥羽における浄土律の学問所とした。奥羽念仏僧らによる霊験や利益、それらを熱狂的に受容する人々がいた。これを体験した相馬中村興仁寺三世宝洲は、出版を介して奥羽の念仏僧を巷間に広めた。

宝洲が編纂に携わった伝記には詳細な評注が付された。特異な体験や行為について、経典や典籍を引用し説明するのである。宝洲が伝記を著した奥羽の念仏僧は、無能・待定・直往・貞伝の四名である。いずれも霊験や奇瑞、苦行や自傷といった逸話に富んでいる。宝洲は、これらの特異な事績を豊富な知識をもって裏付けたのである。宝洲が伝記で紹介したのは、実践的な念仏僧である。宝洲は学僧であると同時に、浄土律僧である。実践的な修行に打ち込む浄土宗僧侶を発見した宝洲が、宗門の宣揚を図りつつ出版したものと考える。奥羽への浄土律北進は、結果として浄土律僧と奥羽の念仏僧の連環を生んだのである。

奥羽念仏僧の伝記出版は津軽へも伝わり、今別本覚寺五世の檀家らは貞伝の伝記執筆を宝洲に依頼したのである。そため、宝洲は貞伝と交流してはないない。宝洲の奥羽念仏僧らの伝記出版は、津軽まで知られていたのである。貞伝の信仰は、貞伝が書写した名号と作仏した仏像の利益にある。特に貞伝が作仏して大量に鋳造された万体仏は、航海安全の仏像として珍重された。津軽のみならず南部・秋田・松前にも評判が届き、信者が集い求めたのである。やがて南部・津軽から蝦夷地を目指す人々は万体仏を所持した。蝦夷地へ貞伝仏が招来したのである。有珠山の善光寺信仰と貞伝仏の利益が集合し、一八世紀後半には、貞伝仏を介した民衆信仰が根付いたのである。貞伝の利益は津軽に留まらず、広範に知られたのは、貞伝の死後も万体仏が鋳造された事にある。さらに貞伝仏に類似した意全仏が鋳造されるなど需要されたのである。携行できる小型の仏像は蝦夷地へ渡る人々の精神的支えとなった。津軽・下北からの出稼ぎ和人の流入が、貞伝仏を齎したのである。

有珠山は善光寺信仰を背景に、廻国行者が訪れた霊山である。アイヌの居住地であったが多くの和人参詣者が訪れたのである。正保三年（一六四六）の奥書をもつ『新羅之記録』には、すでに「御堂」とあある。この「御堂」は、特定の宗派に属するものでは

なかった。そのため宗派にとらわれず、円空や木喰など廻国修行者らが参拝するほか、菅江真澄も訪れている。菅江は貞伝仏が祀られ、信仰されていた事を記録している。また菅江は蝦夷三官寺建立前に貞伝仏が「御堂」に祀られていた。有珠山一帯は霊場として機能した。また、アイヌと和人が接する特異な霊場となったといえる。松田伝十郎が記したように、貞伝の利益を求め、南部・津軽から「臼善光寺参り」が盛んに行われていたのである。有珠山一帯においては、和人集団とアイヌ集団が併存していた。有珠山付近のアイヌは「臼善光寺参り」をする和人らを案内し、止宿させた。当該地域において和人とアイヌは相互扶助の関係にあった。

ウス善光寺が建立され、浄土宗が蝦夷地に進出すると、有珠山に元からあった信仰を基盤にした。ウス善光寺の官僧らは古記録類を調べた上で、略縁起『蝦夷地大臼山善光寺縁起』を版行する。これには、津軽海峡をはさんだ恐山との親和性が図られた。ウス場所は、アイヌ集団の生活圏と和人集団の信仰が交差する特異な地域となったのである。ウス善光寺僧侶は、名所化された恐山をもとに、霊場有珠山を成熟化させた。これによって津軽海峡をはさんだ広域な他界が広がったのである。霊場整備は、ウス善光寺の寺院運営を踏まえたものであった。すなわち幕府の扶持がなくなった場合を視野に入れた政策であった。

一方、ウス善光寺の教化を考察すると、化政期に活躍した徳本の影響がみられる。鸞洲・弁瑞・唯念には捨世派僧の教化と同じく印施がみられる。略縁起の版行や和讃の作成は、本州においても民衆教化に活用されたものである。ウス善光寺では蝦夷地においても和人のみならずアイヌにも同時に実施した。徳本による民衆教化の情熱はウス善光寺の僧侶にも影響を及ぼしたのである。特にウス善光寺二世鸞洲と徳本の関係は深い。ウス善光寺住職のうち出世を果たしたのが鸞洲である。

以下、鸞洲の蝦夷地での事蹟を三点まとめる。①一切経（鉄眼版大蔵経）を蝦夷地にもたらした点、②近隣のアイヌと百万遍念仏を執行した点、③法語集『後世の枝折』を執筆した点である。浄土宗教団にとって、蝦夷地進出は「遠境宗門弘通最初之精舎」で「宗門光輝」であるととらえられ、積極的な教化活動が展開された。さらに鸞洲は蝦夷地渡海前から当該地域の情報を収集しており、それをふまえて「夷境之鎮護」のために一切経を招来したのである。鸞洲の蝦夷地での教化は学僧としては異例である。しかしながら苦行を厭わず念仏修行を実践する徳本に従った経験のある鸞洲にとっては、まさに教線の拡大を視野に入れた弘法の機会であった。これが、幕府の求める教化の範囲を逸脱することがなかったのは、鸞洲が国家の官寺たるウス善光寺の役割を果たしていたことを意味する。また有珠山が和人とアイヌが接する場であった事が大きい。ウス・アブタのアイヌは貞伝仏の利益を求める参詣者を多く目にしていたのである。そのため鸞洲の教化は、他の地域より浸透しやすかったと考える。ウス善光寺のアイヌの名前が記されている過去帳には、ウス・アブタの地域より東の地域は見当たらない。持場内でも地域差があったのである。

蝦夷地で教化したウス善行寺住職が全て出世したわけではない。ほとんどが蝦夷地で死亡しているか、帰還後に隠居している。そのため、蝦夷三官寺住職から知恩院門跡院家となった鸞洲の出世は特筆すべきものであった。鸞洲の蝦夷地晋山は、初代荘海の急逝をうけて決定された突発的な人事であった。鸞洲は江戸へ戻ると、増上寺五六世典海と相談し、宗門の宣揚を図るべく徳本を招く。結果、徳本の念仏勧化による一大流行現象を起こしたのである。これによって、当時の一般大衆のみならず、一橋徳川家の帰依をうけることに成功する。熱狂的に徳本念仏が受け入れられ、各寺院に徳本が招かれ法会を開催した。これを差配したのが鸞洲なのである。文政元年八月二八日に徳本が徳川治済へ申述べた口上写しによれば、その血脈譜のはじめに鸞洲が登場しており、徳川治済が鸞洲を認識していたことは明らかである。徳川治済の推挙があって鸞洲が院家に就任したものと考える。また知恩院門跡院家としても鸞洲の経歴は特異である。文化露寇の際に蝦夷三官寺住職であった鸞洲は、幕府の事情にも通じた存在であった。これは院家就任翌年、就任したばかりの鸞洲が関東下向に随行していることからも分かる。

鸞洲が知恩院門跡院家となった背景を整理する。化政期の対外危機の高まりとともに、朝廷に積極的な動きがみられてきた時期にあって、蝦夷三官寺住職を務めた鸞洲は稀有な学僧であった。知恩院門跡院家へ就任した経緯には、将軍家定の実父で権威を担っていた徳川治済に対する増上寺の接近が背景にある。また息女との婚姻関係を進めていた有栖川宮家と幕府将軍家との関係は良好であったといえる。鸞洲の経歴と徳本の帰依により院家に就任した鸞洲は、位階が権僧正法眼まで上昇し、ウス善光寺歴代住職の中でも異例の出世を遂げたのである。

鸞洲と対照的に、蝦夷地を去った後に富士行者となったのが唯念である。唯念は、江戸時代末期から明治時代初期にかけて富士山麓で念仏勧化をした。唯念の事蹟を追いながら、その信仰の出発点が蝦夷地にある事は明らかである。三世弁瑞は有珠山における信仰登山を整備した。それによってウス善光寺は霊場として多くの参詣者が集った。さらに文政五年（一八二二）の有珠山噴火は多くの横死者が出る大災害であった。横死者の供養をする木食行者の存在は唯念の発心の契機となったのである。唯念の師である三世弁瑞は浄土宗系木食行者の徳本に帰依した。唯念が徳本の念仏講を受け継ぎ、小田原藩領内で活動した。小田原藩が弾誓を始めとする浄土宗系木食行者が入りやすい地域であるといえる。

浄土宗系のみならず、唯念は富士行者義賢や御正体山二世妙善尼などの木食行者と交流した。これら行者らの活動は、富士山麓一帯に広域な情報網があった事を示唆している。唯念の信仰には有珠山と富士山という二つの霊山が影響を及ぼした。霊山で修行した唯念は一所不住の性質をもつ。しかし上野村の人々によって逗留願いが出され、小田原藩も期日を限り許可した。唯念の身元が保証され、蝦夷地での活動が確認された点が大きい。蝦夷地の経歴が肯定的に評価されている。二宮尊徳が「御奉行衆」へ唯念名号を贈っている。唯念の評判が江戸まで知られていたのである。蝦夷地の経験から木食行

者となった唯念は、長期にわたって富士山東麓を教化し村落社会の需要に応えたのである。蝦夷地から帰還した僧侶の事例として鸞洲と唯念を挙げた。全く異なるようであるが、蝦夷地と徳本というキーワードを同じくする。唯念の身元保証でも蝦夷地の事蹟が述べられた。当該時期の、一般民衆の蝦夷地認識を知る上でも事例となる。

鸞洲を事例に、第一次蝦夷地上知における教化を史料から検討していくと、第二次蝦夷地上知以後に評価が試みられた事が分かった。第一次蝦夷地上知は、蝦夷三官寺建立から文化露寇やゴローニン事件を経て、特にロシアのとの緊張が高まった時期にあたる。この時期のウス善光寺住職らの教化を顕彰したのが松浦武四郎である。先行研究におけるウス善光寺のアイヌ教化は、松浦武四郎『東蝦夷日誌』弐編に依拠してきた。これを詳細に検討していくと、幕末にいて、ウス善光寺のアイヌ教化が再評価された事が分かる。松浦武四郎記念館所蔵の「蝦夷善光寺鳳誉鸞洲大和尚垂誡」から、武四郎が観察したアイヌ教化の記録ではない。二世鸞洲の弟子である行誡が史料を提供したのである。

第一次蝦夷地上知のアイヌ教化の記述や資料を抄録した。その背景には、第一次蝦夷地上知におけるアイヌ教化の再評価へとつながった。翻って第二次蝦夷地上知の親規寺院による蝦夷地進出という政策の転換からも、浄土宗僧侶の教化を示すには適した時期といえる。さらに行誡は、師である鸞洲に倣い江戸に浄土律院の建立を図った。よって行誡にとっても『東蝦夷日誌』弐編の刊行は、時宜を得たものであった。松浦武四郎が「観察」していないアイヌ教化を詳細に記述した点についても、アイヌへの仁政を勘案したことによると考える。先住民族であるアイヌの「御百姓」化に伴い、宗門人別改めを見越した動きといえる。松浦武四郎のアイヌ観からみて、ウス善光寺僧侶によるアイヌ教化は評価に値するものであった。そのためアイヌ自身が自発的に行う風俗の和風化を理想とした点を踏まえてみなくてはならない。武四郎と行誡の文化交流から、武四郎によるウス善光寺教化の評価を知ることができるのである。武四郎の刊行本については、時期ごとの変遷を追って史料を検討する必要がみられる。今後も武四郎の史料は背景を踏まえ引用する事とする。

さて武四郎によって鸞洲の事蹟が評価されたのは、弟子の行誡の働きかけが大きかった。近世を通じた仏教の課題は僧風の刷新にあったといえる。戒律を護持する集団が現れては、官僧との軋轢を生み、やがて形骸化される。しばらくすると戒律が希求される繰り返しである。この象徴的な存在が鸞洲といえる。期せずして巡った蝦夷三官寺住職という機会に対し、鸞洲は宗門の光輝として積極的な教化を図ったのである。蝦夷地渡海の前に、木食行者として知られた徳本に随従した経験をもつ鸞洲は民衆教化をすでに実践していたのである。徳本のような実践を伴う念仏行者を捨世派僧と称する。奥羽の念仏聖・無能と浄土律僧の交流が示すように、実践的念仏修行者たる捨世派僧と戒律を希求する興律派僧は、しばしば会合し、連関する。鸞洲の場合、同時代的に活躍した徳本がそれに当たる。

徳本の直接的な民衆への働きかけは熱狂的な信仰現象を生んだ。蝦夷地渡海前に、鸞洲

は徳本を江戸へ招いた。民衆の熱狂を目の当たりにした鸞洲は、蝦夷地で徳本のような直接的な民衆教化を実践する。すなわち、当時、江戸で行われた徳本の法会や印施を蝦夷地での教化に応用した。アイヌ語を用いた法話など、鸞洲が教導化益の志をもって活動したのは明らかである。鸞洲による教化は幕府の期待する民衆教化から逸脱するものではなかった。近世仏教が担った民衆教化の側面を、鸞洲が積極的に取り入れたのである。

さらに鸞洲は、蝦夷地帰還後に知恩院門跡院家となり、有栖川宮家からも帰依を受ける。その契機は、有栖川宮熾仁親王の祖母である妙勝定院宮と信行院による閑院宮美仁親王の菩提を弔う一寺建立の発願にあった。鸞洲は、この機に乗じて、浄土律をおこした霊潭性澂が創建した洛東聖臨菴（照臨院）の再興を図る。鸞洲は浄土律の系譜に連なる僧侶である。その法系をたどると徳門普寂にたどりつく。普寂もまた元文元年（一七三六）頃、聖臨菴に寓して浄土律の諸師から受戒を請けているのである。普寂徳門の系譜に連なり、維新後の仏教界を牽引した福田行誡の師でもあった鸞洲は、近世浄土宗における幾筋かの傍流が収束する先に鸞洲がいる事が分かる。鸞洲は蝦夷三官寺住職に選ばれ、京都の律苑再興を成し遂げた。鸞洲は、近世戒律復興から生じた仏教思想近代化の萌芽を継承し伝えた僧侶なのである。

以上、僧侶の事蹟を追い、近世浄土宗と蝦夷地を概観した。幕府の蝦夷地直轄によって蝦夷地へ正式な仏教寺院が誕生した。しかしウス善光寺の事例をみると、幕府の動きのみならず法門の繋がりや戒律復興の機運による影響がみられた。さらに貞伝信仰のように、民衆によって伝播した信仰が有珠山の霊性と相まって根付いた。よって先住民族のアイヌや蝦夷地在住和人を含めた重層的な信仰世界が広がったのである。